

## 松下国際財団 研究助成 研究報告

【氏名】 王 戈

【所属】(助成決定時)お茶の女子大学

### 【研究題目】

申請時テーマ:

情報環境が人々の外国に対する態度に及ぼす影響: 在日留学生の対中対韓態度に関する縦断研究  
研究報告テーマ:

情報環境が人々の外国に対する態度に及ぼす影響: 日本人大学生と在日留学生を対象とする  
縦断研究

### 【研究の目的】

自国と利益が一致しないと思われる外国に対する人々の態度は、偏見的になりやすい。そうした偏見は現実よりも、自国で入手できる相手国に関する情報によって決められると言われているが、実証研究はまだない。日本では、日本と中国の利益の不一致を伝える情報が多く、日中の利益が一致しないと考える人も多いが、日本の対中情報環境が人の対中態度に偏見をもたらすかを検討する実証研究はない。本研究は日本の対中情報環境が人の対中態度に影響を及ぼすかを調べるため、同一人物を対象に同様な調査を繰り返して行うパネル調査を実施した。

もし、日本にいる日本人を対象に情報環境の影響を検討するのであれば、日本人は長年日本に住み、情報環境が彼らの態度への影響は飽和状態にあり、測定されにくい。そこで、本研究は日本人のみならず、日本にいる中国人、韓国人も対象に、2波のパネル調査を実施した。

### 【研究の内容・方法】

回答者 外国人調査は、関東地域の日本語学校 7 校と大学 3 校に在籍する中国と韓国の学生を対象に、2009 年 4 月～2009 年 12 月の間に実施した。1 回目に答えた中国人学生は 128 名、韓国人学生は 103 名、回収率は約 30%。2 回とも答えた学生はそれぞれ 21 名であった。日本人調査は、関東地域の大学 6 校に在籍する日本人学生を対象に、2009 年 4 月と 2009 年 7 月に、授業で一斉配布の形で質問紙を配布回収した。1 回目に答えた学生は 608 名、2 回とも答えた学生は 377 名。3 カ国の質問紙はほぼ同じものであった。

情報環境 情報環境への接触は、中国の情報への興味(10 項目)、過去一週間の中国の情報への接触頻度(5 項目)、過去一週間の日本のメディアへの接触頻度(5 項目)、過去一週間の日本のメディアへの接触時間(5 項目)の 4 つの尺度で尋ねた。

偏見 利益衝突が存在すると思われる外国への態度は、外国への偏見尺度(13 項目)、偏見的感情尺度(8 項目)、ネガティブなステレオタイプ尺度(8 項目)の 3 尺度で尋ねた。

利益認識 中国人に中日、韓国人に韓中、日本人に日中の利益衝突に関する認識を 2 項目で尋ねた。

手続き 日本の情報環境への接触が回答者の対中態度に及ぼす影響を分析するため、図 1 の分析モデルを使用した。1 回目の情報環境変数と偏見変数を独立変数に、2 回目の偏見変数を従属変数に、重回帰分析を実施した。

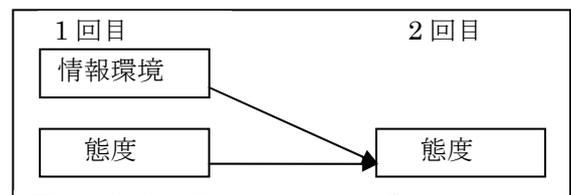


図 1 分析に用いたパス・モデル

## 【結論・考察】

1 回目の記述統計の結果 国籍によって、回答者の対中態度に違いがあるかを調べた結果、偏見尺度、感情尺度において、日本人にのみ対中偏見が見られ、韓国人は中国人に比べて対中偏見を否定しない傾向が高かった。ステレオタイプに関して、中国人にのみ否定する傾向が見られ、日韓の間に差はなく、賛成する傾向が見られた。

国籍によって利益認識に違いがあるかを調べた結果、国によって認識が大きく異なった。日本人は中国が日本に不利を与えると考え、韓国人は中国が韓国に不利を与えないが利益をもたらすこともないと考えた。中国人は、中国が日中の両方のためになると考えた。

パネル分析の結果 3カ国の回答者の情報接触が彼らの対中態度への影響をそれぞれ調べた結果、中韓では、情報環境による影響は見られなかった。日本人では、1 回目の対中報道への興味は、2 回目の対中偏見、偏見感情とステレオタイプを低めた一方、1 回目の日本のメディアへの接触頻度は、2 回目の中国に対する偏見感情を高めた。

情報環境が利益認識に及ぼす影響を分析した結果、日本人のデータにのみ、1 回目の日本メディアへの接触頻度が日本人の 2 回目の日中衝突認識を高めた。

考察 情報環境の影響は日本人にのみ確認されたのは、外国人データが少なく、実証するにはいたらなかったと考えられる。日本人の場合、日本メディアへの接触は日中の衝突認識と対中偏見を助長し、中国情報への興味は対中偏見を抑制したが、利害認識に影響を及ぼすことはなかった。これは日本の対中報道の偏りを示唆すると同時に、先行研究が指摘したように、利益認識が外国に対する偏見を規定する最も強い要因であり、いったん形成されれば、解消しにくいことを示唆していると思われる。